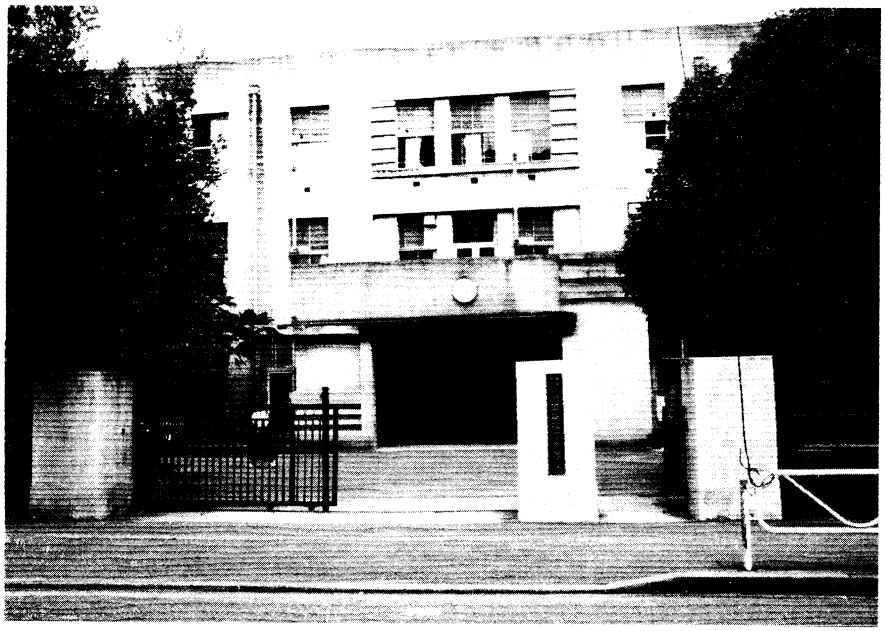
神奈川県立横浜平沼高等学校
ハンドボール部

創部40周年記念誌



平成元年12月10日

－下さい－

校歌

学びの道にいそしむは
我等が日々のつとめなり
みどり、白し、富士の嶺は
我等が胸のかがみなり
百船千船つどう
港の栄えきはみなし
栄ゆる春をむかえつつ
みどりの花と咲き生ずむ

昭和24年8月　夏合宿最後の日

発刊にあたって

ハンドボール部ＯＢ会会長　　坂　本　　確

ハンドボール部は創部40周年を迎えることとなりました。

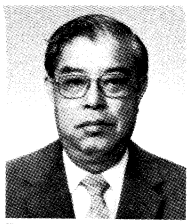
戦後間もない昭和22年、平沼高校前身の県立第一高女のハンドボール部が誕生し、昭和25年に新学制により平沼高校として本校が再出発、同時に男子部が出来ました。

当時を少し振り返ってみようと思います。県内の高校数は現在よりはるかに少なく、又ハンドボールの普及度も低かったために、女子は本校、大津高校、江南高校の３校、男子は翠嵐、希望ヶ丘、鎌倉学園、関東学院等で10校前後あったと思います。

女子の栄光とは全く逆で、男子は１年生だけで部員数も少なく、試合のために11人のメンバーを集めるのに四苦八苦で、部員外からの応援を得てやっと試合に出られる状態でした。卒業する迄の３年間で勝ったのは３，４回ではなかったかと思います。その中で一番印象に残っているのは、３年生の春の市民大会で関東学院三春台のグランドにおいて法政二高との試合で、前半１－５で負けていましたが、後半大逆転し６－５で勝った試合です。その後、昭和31年に男子として初めて関東大会出場という輝かしい歴史を刻むことが出来ました。

それからしばらくして、競技方法が11人制から７人制へと変わり、又部活動もいろいろと波乱はありましたが、40余年経った今も現役の諸君がハンドボール部を受け継いで活躍しています。これからも益々ハンドボール部が発展するとともに、50周年、60周年で又再会出来ることを期待しています。

昭和25年８月　夏合宿（平沼高校グラウンド）



部創立40周年を祝して

神奈川県立横浜平沼高等学校長　**石　川　　浩**

「同窓」というひびきはいかにもなつかしい。同じ窓の下に在ったということなのか、窓をとおして同じ空を見ていたということなのか。いづれにしてもそこにはいつも風景がある。

まして、「同じ部活動」をしていたということであればなおさらだとおもいます。先輩にしごかれ、汗を流した運動部の思い出となれば、たゞ単なる思い出の甘美さとしてだけ立ち現れてくるだけではないと思います。練習のこと、試合のこと、そして合宿で友と語りあったこと、いくつもいくつも重なりあって、皆様の平沼高校時代の存在感の基底を形づくっていることでしょう。そこには単なる風景だけでなく多くの人間が点在し、自我の形成期の大きな存在としての風景があるはずです。いま、横浜高校ハンドボール部の記念誌を発刊されると聞きました。この記念誌が、生き生きとした風景となって皆さまにせまるにちがいありません。

皆様にとって、なつかしい校舎もグランドも、今様変わりとなりました。平成３年度の末には、新装なった新しい平沼高校の誕生です。それまでの２年間は、南区の県立清水ヶ丘高校の隣接地でプレハブ生活です。体育館もありません。皆様方の後輩諸君には大変な不便をかけるわけです。ハンドボールの主活動がグランドですので、不幸中の幸いともいえましょう。しかし、こんな時こそ、部員の連帯を強くして、なつかしい風景の思いでをつくって欲しいと思います。

かつて、関東大会の常連といわれたハンドボール部もやゝ低迷気味といえるでしょう。とうぞ、これからも暖かい目で、しかも厳しいご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

思い出の心字池

創部40周年を祝して

神奈川県立橋本高等学校長　　奈良澤　芳　雄

創部40周年おめでとうございます。

先輩後輩の強い絆により築き上げた伝統に心からお祝い申し上げます。私は、昭和29年に名門平沼高校で教師として第一歩をスタートし、同時に全くハンドボールには経験のない者でしたが、昭和32年迄ほんの僅かの期間ですが顧問の栄誉に浴させていたゞきました。顧みると、もう約35年前になります。当時の部員一人ひとりの活躍が懐かしく浮び、私自身も急に一青年時代に帰ったような気がしております。丁度、昭和30年には、神奈川国体があり、私もその役員として手伝わせて頂くなど数々の思い出であります。当時のハンドボールは、現在と異なり、11人制で、コートも広く、メンバーを揃えるのに常に苦労をしていたと思います。特に夏休みの合宿など、私が指導未熟のために、現在、横須賀市立高校々長である澤田賢昭氏にコーチをお願いしての練習でした。昭和29、30年は、女子が大変に強く、30年には関東大会に出場しております。これもメンバーが足りずにバレー部等の応援を得て出場したと記憶しています。また、31年は男子が関東大会場、これもバスケット、山岳部から４人の応援を得て、山梨県塩山市で開催されました。当時学校では遠征費など経済的に大変苦しい時代でしたから、校長と話し合って、初出場でもあり多分一回戦ボーイだろうと言うことで一泊分だけの資用で参加しました。すると、第一日目の栃木県石橋高校に勝ち、寄り合いチームながら大変な頑張りで、第二日目へと進んだのであります、生徒は喜び、困ったのは私、一泊分の資用がない、実家に帰してあった女房に電話を掛け、電報為替で送ってもらい、胸をなでおろすと言う一幕も昨日のように思われます。若い時の楽しいこと、苦しいこと、今は良き思い出です。創部40周年おめでとう。益々のご発展を祈ります。

思い出のハンドボールコート

送球部からハンドボール部へ

神奈川県立初声高等学校教頭　齊　藤　幸　雄

平沼高校ハンドボール部創立40周年おめでとうございます。

私は、母校の体育教師として昭和36年から15年間お世話になったわけですが、ハンドボール部との関りは昭和36年私が大学４年の時、週16時間体育の非常勤講師を勤めていた際に、ハンドボール部の顧問であった佐藤敏雄（現藤沢青少年会館）先生から、コーチを紹介してほしいとの要請があったので、同級生の島田氏（当時日体大ゴールキーパー）に指導を頼み、夏合宿には一緒に泊まりながら練習を見る頃から、腐れ縁がはじまったようです。

この頃は、平沼の送球部の伝統的練習法（体力の向上のための長距離走・うさぎとび等）が幅をきかせており、島田氏の理詰め指導には戸惑いがあったようですが、少しづつ洗脳されていくのを感じました。

また、佐藤先生が転勤された後は、久間木先生とご一緒に顧問となり、昭和43年大山先生（現中沢高）にバトンタッチするまで、ハンドボール部とお付き合いをさせてもらいました。まさに、この時期は、11人制（送球部）から７人制になるという混乱の時期ではなかったかと思います。

私は、ラグビーしか指導出来ないので、ハンドの指導は、外部の人に頼まなくてはと思い、７人制はスピードが勝負と考え、バスケット出身の親友の猪野先生（現本郷・白山高）を強引に口説き、体育の授業を受け持っていただく傍ら、部のコーチを引き受けてもらうことにしました。条件は私は口を出さないから好きなように指導して良い、しかし、強くしてほしい……。

体育の授業のない日も、放課後、学校に来ては部の指導を、終るとすぐにタクシーで本務校（県商工高定時制）に駈け付けるという毎日でした。

この頃、今まで部の面倒を見ていてくれた多くのＯＢをはじめ男子部員と、血の雨は降りませんでしたが、険悪なムードが幾度となく起きました。しかし、猪野先生の情熱と努力が、部員をはじめＯＢ諸兄・姉にも通じすぐに円満解決、逆にＯＢの若林・大八木君等の努力でＯＢ会の組織も充実され、現役に対して、多大な援助もしていただいたことを思い出します。

ラグビーの指導に熱中していた私は、ハンドボール部の力になれなかったばかりでなく、とくに、送球部時代のＯＢには、送球部時代の練習法では駄目だと口出しし、嫌な思いをさせてしまった事と思います。この場を借りてお詫びします。

最後に、40周年を節目として、現役は関東大会の出場を目指し努力を、ＯＢ諸兄・姉は母校ハンドボール部の発展のため限りないご支援をお願いします。

平沼高校ハンドボール部40周年によせて

顧　問　　**松　本　　宏**

つい先日、神奈川県ハンドボール協会創立40周年記念式典が、横浜で行われましたが、平沼高校ハンドボール部のＯＢの方々が、神奈川県の先駆者として、40年という長い歴史を築いてこられた事は、大変素晴らしい事だと思います。戦績を見ても、県ない大会で、優秀な成績を納められて、何度となく、関東大会、全国大会に出場されています。現在、高校の部については、平成元年度、協会加盟登録数で、 100校を越えており、県内のトップチームにおいては、昨年度の全国大会で、男女共に準優勝、全国選抜大会男子準優勝、今年度、関東大会男子優勝、今年度、国民体育大会男子準優勝と、レベルも全国のトップにあります。残念ながら、平沼高校は、ここ数年県外大会に出場していませんが、ＯＢの方々の創られた歴史に恥じぬよう、関東大会出場を目標に、日々練習に励んでいます。最後になりましたが、日頃部員達への御援助深く感謝いたします。今後とも、ＯＢの方々の期待にそえるよう頑張りますので、宜しくお願い致します。

現役・男子ハンドボール部部長　　**佐々木　雄　也**

ハンドボール部40周年記念おめでとうございます。現役男子ハンドボール部の12名は、先輩方の後を継いで毎日の練習に励んでいます。今の僕達の練習内容を簡単に紹介します。まず体操やランニングでウォーミングアップをしてから対面パス、三角パスなどのパス練習をします。その後マンツーマンやシュートをやります。シュートは最初の頃に比べると、みんなかなりうまくなっていて、しっかりとコースを狙えるようになってきています。シュートが終ると次は、チームプレーの練習です。まずセンターやサイドの３対３をやります。この頃は、サインプレーなども少し覚えてだんだん本格的になってきたななどと思っています。その後にやる速攻も連継プレーなどを教わり、攻撃のはばがひろがりました。この速攻練習が終るころはもう、真っ暗でほとんどの部活が活動を終えている中、僕達は鉄棒、ランニングなどしています。

これが僕達の毎日の練習です。休みもほとんどなく、かなりきついけれども、みんな仲良く頑張っています。

今はまだ一年生だけの弱いチームだけれども、いつかみんなに注目される強いチームになりたいと思っています。これからも松本先生の指導のもとで、しっかり練習していき、必ずその目標を成し遂げたいと思っています。

思い出を語る

昭和27年卒　49期　　**能　登　幸　子**（旧姓　佐藤）

40年前の私達学生時代のスポーツは、一つの歴史として振り返るような遠い昔のことになってしまいました。

昭和22年、山口先生のご指導のもとに創設スタートした平沼高校ハンドボール部は、当時送球部と呼ばれ11人制でした。ボール３、４個とゴールネット、そして空気入れが、貧しい我が部のすべてでした。

今と違ってボールは皮製で中のチューブに空気を入れ、口を皮ひもで編むようにとじます。ボールみがきは部員の欠かせない日課のひとつでした。

ひだのあるいわゆるチョウチンブルマースタイルで広いグランドを真黒に日焼けした顔に汗を光らせよく走り廻ったものでした。

合宿には作法室が順番に割り当てられ、各部先輩方が食事の世話に来られ、とりわけバレー部の、そのなごやかな雰囲気を羨ましく思ったものです。

新設で先輩を持たない送球部に竹越美代子さんがお世話下ださったこともありました。

のちに現在の皇太后陛下の体操の先生をなさった竹越さんは、当時東京お茶の水大の学生で母校へ時折顔を出されていたのを山口先生が頼んで下ださったのだと思います。

私は家が学校のすぐ近くにあったので、合宿の意義を理解しない両親が家から通えるという理由でこの第一回の合宿を許してくれず、期間中は午前練習が終わると家へ帰り又、午後の練習に出かける、練習に参加しても合宿の仲間には入りきれない淋しさを感じたものでした。

この合宿中にトランプ占いがはやり、昼食後の休憩時間には気さくで明るい竹越さんを囲んで賑やかな恋占いがひときわ楽しかったのを覚えています。好きな人を心に念じてカードを繰り、めくりながらカードの出具合いで占うという単純なものですが、年ごろの乙女たちが頭を寄せ合い、やれ片思いだ相思相愛だと一喜一憂し、はしゃぎ青春の１ページを刻みました。

数知れぬ多くの人達の青春の日々を暖かく見守り包んでくれた校舎も、今では老朽化が進み近代的な校舎に生れ変わる日が近いようですが、私達の脳裏にいつまでもいつまでも残り続けるのは、やはりあの校舎、あのグランドなのです

「ちょっと前の昔」

昭和30年卒　52期　　小　網　博　子（旧姓　田川）

早いものです。卒業して35年。

私とハンドボールの出会いは。一年上の生井先輩（故人）が中学校にいらっしゃって、「小野田先生（元体育教師）から聞いて来たんだけど、送球部に入らない？」というお誘いからでした。まだ合格発表前で、入学出来るかどうかわからないのに、「先生どうしましょう？」「行って来いよ」あつかましくも簡単な気持ちで参加してしまったのがきっかけでした。その後日体大に入り、全日本選手権で、第２回、第３回に出場し優勝出来るとは夢にも思っていませんでした。

高校のあの若い頃の懐かしい思い出は数々……あの頃は確か「送球部」と呼んでいたと思います。３年生は一人もおらず減法強い２年生が９人。それに私達新入生が４人。ブルマも今のピッタリと格好のよいものと違い、ヒダのついたブルマ。ユニホームはエンジ、あの頃は最高のものでしたが、雨に濡れても、洗っぬいても下着に色がつく、今では考えられない製品でした。

毎日練習が終わって、手も洗わず鯛焼き屋へ。楽しかった、作法室での合宿。関東学院三春台のこと。グチャグチャのグランド。スパイクがきかず、ワラジを履いてずぶ濡れ。賢ちゃん、次郎長、象さん（呼び名でゴメンナサイ）すばらしいコーチが３人も練習をみて下ださっていました。どうしてと今でも不思議です。大変に恵まれていました。誰れがステキとか、かっこいいとか。乙女心が躍ったものです、いろいろ感激した中でも、1952年８月。藤井寺にて、第３回全国高校ハンドボール選手権大会に先輩と出場出来たのは最高の喜びでした。あの頃も平塚江南高校が一番強かった。強敵を破っての出場ですもの。平沼高校を、そしてハンドボールをこよなく愛している一人です。どうか現役の皆さん燃えて下さい。

昭和27年８月
第３回全国高校
ハンドボール選手権大会にて
（於：藤井寺球技場）

さようなら、ポイントゲッター

昭和34年卒　56期　　**清　水　敬　之**

「いくぜーッ」「オー！」 —— グラウンドにはじけた掛け声は、校舎で反響して向かいの病院でもう一度はね返り、戻ってくる。練習は走ることから始まり、二列縦隊の駆け足と体操で終わった。創部以来40年近く、このエネルギッシュな声は今も変わることなく、若い闘志をかきたてていることだろう。

広いフィールドを、ときには泥まみれになって駆け回る11人制だった我々の時代。34卒が主力の我がチームは、その２年前の関東大会（山梨県塩山市）出場の栄誉を再び手中にすべく練習に明け暮れた。坂本確さん（現ＯＢ会会長）たちのシゴキを受け、合宿では諸先輩から貴重な指導をいただいたが結局、残念ながら夢はかなわなかった。しかしチームは良くまとまり仲間意識も強かった。

試合開始の笛が鳴る。センターフォワード・常盤栄司君の声がひと際高く響く。黒ブチ眼鏡のツルをゴムバンドで固定しての“戦闘態勢” —— 。ダッシュ、細めの身体をムチのようにしなわせて打つ強烈なシュート。我がチームのポイントゲッターであり文字通りの要であった。私は主将を務めセンターバックを守っていたが、彼が事実上の牽引車であった。その常盤君がことし５月23日になくなった。男盛りの49歳。

眼鏡の奥にやさしく光る目は、その面倒見の良さとともに人々を引つけ、いつも魅力ある「何か」を秘めていた。政治家として、庶民の味方として、彼は一貫して市民の牽引車であり“革新”というボールを手にダッシュし、着実にポイントを重ねていた。政界の右潮流は彼を支え、押し上げようとしていた。　訃報に接したすべての人が悲嘆にくれた。常盤君の存在が大きかっただけに我々チームメイクの痛恨も深く「40周年」さえ待たずに世を去った、その不条理に泣いた。あの、闘志をかきたてる、気合を込めた高い声が今日もグランドに聞こえるような気がする。

昭和31年夏　関東大会（於：塩山）にて

昭和39年卒　61期　**森　口　康　子**（旧姓　榎戸）

突然の原稿依頼で、さて何を書こうか確かな記憶と、不確かな記憶をたどっているうちに、みんな、確かな記憶へと蘇ってくるから不思議なものです。

高校一年の時、翠嵐と平沼の恒例定期体育大会（翠平戦）にハンドボールの試合の組合わせがありましたが、人数が集りません、当時、佐藤先生は何人かに声をかけ、野武士軍団の様に、陸上部、バスケット、バレー部員やその他数人をかきあつめ試合にのぞみました。ルールなんてあったものではありません、頭の中にルールをたたき込んで付焼刃、傷だらけ、怪我だらけ、でもとても楽しいスポーツでした。大会後、先生と『クラブを作りませんか？』……『作りましょう』の一声で苦労（？）が始まりました。

クラブをつくるといったはいいけれど、たった３人（猪狩、岡田そして私）、の無鉄砲仲間、ユニホームもなければ道具も借りもの、それでも公式戦に出てしまうというからこの図々しさ、なにしろ３人ですから、あとは全部、各運動部のよせ集め、一度助っ人として出てくれると「二度とあんなハードなスポーツやだョ！」と断られる始末、当時県下に４校ほどしか女子の部は無く、将来期待される存在だ！と自負してはいたのですが部員集めに一苦労、それでも２年目には大型新人（上田）１人、を上手にだまして（？）スカウト、３年目にも大木さん他をだまして（？）スカウト、それからは屈折しながらもユニホームを手作りしたり、夏休みには死にそうな合宿したりと、今に思えば楽しい思い出……。

そのクラブが今も健在でガンバッているんですもの嬉しいかぎり……。

昭和40年卒　62期　**上　田　和　子**（旧姓　奥沢）

家族と共に静岡県を十年ほど渡り歩いた末に神奈川県に舞い戻って三年になろうとしています。ハンドボールをやっていた頃からすでに四分の一世紀もたっていて、長い間思い出すこともなかったのですが、級友と平沼高校のグラウンドに立った時、様々なことが鮮やかによみがえってきたのに我ながら驚きました。

高校への入学当時、北海道から出て来て半年くらいしかたっていませんでした。小学校、中学校ではスポーツらしきものと縁がなかったので、高校ぐらい運動をやろうと思っていた矢先に、“ビンさん”こと佐藤先生から声がかかったのです。しかし、いざとなると迷いが大きく、半年ぐらいは合唱部とかけ持ちをしていました。初めての試合で、ボールを受け取ったとたんに反対方向に走ったのも、今となっては懐かしい想い出の一つです。

当時の女子部は再生したばかりで、部員だけでは一チームに足りずに必ず他の部の“助っ人”を頼んでいました。私との同期はナシ。先輩が受験体制に入るとほとんど一人グラウンドに残され、陸上部や男子の仲間に入れてもらって何とか春までつなぎまし

た。次の入学式以後、新入部員勧誘に力がこもったのは当然です。この時は先輩達も全面的に協力してくれ、やっとつかまえたのが星野さんと山崎さん、その後続々と八人程入部して、一チームできるとわかった時にはほんとに嬉しかった。そして3年の時、何と関東大会出場。いつにない緊張感を経験したし、みんなと負け試合の後、五色沼（だったかな？）でボートで遊んだことの方が記憶に残っています。

その時の数年が、40年のハンドボール部の歴史の一部であると知って、今までとは一味違った感概を味わっているところです。

思い出深い高校時代

昭和41年卒　63期　　**鈴　木　隆　夫**

横浜平沼高校ハンドボール部が創立してから40年、我部が平校と同じように伝統のあるスポーツ部として今日あることを誇りに思っています。私が現役の頃はもちろん5年位前までは、昭和37年卒の4年先輩が存じあげる最年長のＯＢでした。しかし、その後多くのＯＢ、ＯＧの御協力により平校において最初にハンドボール部を創部された多くの大先輩がおられることが判明し、すべてのＯＢ、ＯＧに御参集いただいたＯＢ会が結成されていることを大変意義あることと思います。

さて、41年卒は男子5名、女子8名で、我々男子の自慢できることは3年の時に関東大会（県で4校）に出場できたことです。聞く所によれば、我々の後は出場していないとのことで、幸運に恵まれていたと思います。当時コーチであった猪野先生、斉藤先生を始め、諸先輩に指導を受けた賜物と感謝しております。コーチの科学的な練習法と諸先輩の精神的（？）な練習がうまくミックスしての勝利だったのではないかと分析しております。現役時代を今思うと、様々な光景が眼に浮んできます。当時土曜日になると必ず現われる先輩がおられました。非常に厳しい練習ゆえ、我々は、しばしば意図的に三ツ沢グランドへ練習に行きました。そんなある日、神奈川新聞の記者に三ツ沢の平沼亮三氏のブロンズ像とともにランニングの姿を撮って頂き、数日後の横浜版に掲載されたことを覚えております。又、降りしきる雪の中を雪景色を見ながらマラソンをした事、夏の強化練習の時、にわか雨にみまわれグランドの中を雨が降り進むのを見たこともあり、水球とまちがうほどの大雨の中で練習した事もありました。そして、私にとって何よりも意義深い事は、ハンドボールに明け暮れた高校時代が人生の中で一生けんめい生きた時代の一つだったことも確かなようです。ハンドボール部ＯＢ会もこれからより一層の基盤を確立していかなければなりません。より多くのＯＢ、ＯＧが参加して頂く工夫も必要です、又現役の諸君に物心両面でできるだけの援助も重要な仕事です。多くのＯＢ、ＯＧの御協力を切にお願い申し上げます。

ハンドボールと平沼と

昭和41年卒　63期　　大木孝枝（旧姓　星野）

私達の代は、男子も女子も関東大会へ出場した。これは、かなりの快挙なのである。特に女子ハンドは、バスケくずれ、テニスくずれを、やっとかき集めてのチームだったからお世辞にも運動神経はほめられたものではない。事成ったのは、ただただ、猪野コーチ（現在は本郷先生）のお力であった。それに「一生懸命やっているから女子ハンドを頼む」と転勤時に言い残して下ださったビンさんこと佐藤先生、それではと、非常勤講師でもあり友人である猪野先生を迎えてくださった斎藤先生が、これへと繋げてくださったのだと思う。

猪野コーチのしごきは語りぐさになっている。手に竹棒を持っての練習は、グランドの他のクラブが見物する程であった。女子があれだけ出来るのだからと、お隣のラグビー、野球部員に喝がいれられたのは言うまでもない。こうして、猪野旋風が運動部に吹き荒れた。時あたかも、東洋の魔女を育てた大松監督が『だまって俺についてこい』などという本を出した時代でもあった。

コーチは女に恨みでもあるんじゃないか。失恋の憂さを晴らしているらしい。などといい合ったりした。柔道部は陰で猪野公などと呼び捨てにしたりして、私達に友情を示してくれた。なんと心優しい男たちであったことか。聞くところによると斎藤先生は、ウチの子供たちは皆アタマが良いので、知的に、頭脳的に指導してくれるよう頼んだというのだから、一体どうなっていたんだろう。

かくして、キーパーの山さんに後年、「ハンドを思えば、お産の苦しみなんか何でもなかった。」と言わしめる程のきつい練習のおかげて、私達は昭和39年夏、桐生大会へと旅立った。

御苦労様でした猪野先生。ありがと先生。

ラグビー部がなだれ込み、野球部の硬球が飛んでくる。その合間をぬって陸上部が走る。恐ろしい程狭い校庭ではあったけれど、年を経てみればそれなりの効用があったのかもしれない。

柳を背にグランドに立てば、昔のままの風景が私達を過ぎた日々へと引き戻す。大切な場所でもあったけど、もうすぐこの風景は、かき消されるのだろう。

５本並んだ柳は、随分太く高くなって、この春、通りかかるとフワフワした白い綿を舞わせるように落としていた。昔はこんな記憶がないから、いつからなのだろう、まるでエンディングを知っているかのように。

共有した思い出の場所はこれでなくなるけれど、その前に、こうして記念の会が持てた事に大きな意味を感ぜずにはいられない。

ともかくひとくぎり。それぞれの人間形成に大きくかかわったであろう、この平沼、グランド、ハンド、校舎を大切に胸にとどめつつ次の新しいものへと繋げていこうと心新たな私達の集りでありたいと思う。

昭和39年夏　関東大会（於：桐生）にて

ハンドボールを通してお友達になろう○○○

昭和46年卒　68期　　**津　田　純　子**

「私はお姉さんよ」――。

そんな気持で見ていたのに、現役の高校生達にとっては親の世代なのです。私たちが牛馬のごとくグラウンドを走っていた頃、この世に“生”を受けたなんて信じられます!?そういえば、いつぞやの総会の折、それこそ私達が生れた頃に現役でいらしたというOB・OGの方々が同席して熱っぽく当時の事を語っていらしたっけ――。

受け継がれ　　まさに、伝統を感じます。

それこそ幾多の大会で耀かしい歴史を残してきた……とはいえないクラブですが、その時代　　に多くの思い出を包み込んでここまで育ってきたわけですね。

太い大樹に成長したハンドボール部の根を諸先輩方がしっかりと守り、現役諸氏が若い芽を出していく。私たちは一体どのへんに位置しているのか。さぁ……　もちろん気持は、若い芽ですよ。本当に。

まぁ、そういった諸々でみんなお友達に世代を越えてなれたら素敵ですね

そんな事を祈りつつ、今回もそうですが、いつもOB会を支えて下さっている皆様に感謝の気持を送ります。そして、今後のハンドボール部の発展を願っています。

ハンドボール部と私

昭和56年卒　78期　　**青　柳　祐　子**（旧姓　松下）

今度、母校が、高層の最新設備を備えた新校舎に生れかわるという。高校生活の三年間を過ごした校舎、決して奇麗とは言えなかったけれど、思い出深いあの建物が失くなってしまうのかと思うと、やはり寂しい。

夏の苦しい合宿の時、寝泊りした教室や廊下は、夜になると昼間とは雰囲気を変えてとても不気味だった。あの頃から、もう十年余の歳月が流れたなんて信じ難いが、もっと信じられないのは、真夏の太陽ので、汗や泥にまみれて走りまわっていたということだ。私は、体が小さくて、体力も劣っていたし、ハンドボールは正直言ってへたくそで、チームの足を引ぱっていた。途中、体を壊してプレーをできない期間も長かった。そんな私が、何人かの人が退部していく中で、最後までなんとかやり通せたのは、佐藤先生（その当時は菊地先生）をはじめとして、先輩方、チームのみんなのお陰だと思っている。今、冷静にあの頃の自分をふり返ってみると、練習は人一倍まじめに、一生懸命やっているのに、いざ試合となると全然だめ。練習が、練習のための練習に終わっていて、実践（試合）につながるように消化できないまま、ただ、その場のことを必死でやっていた自分が見えてくる。それでも、自分の力の限り体を動かし、みんなで、苦しい練習も冷たいカルピスも分け合っていたあの頃は、私の人生の中の大切な一齣だったと思うし、高校時代にハンドボールをやっていて、本当に良かったと思っている。

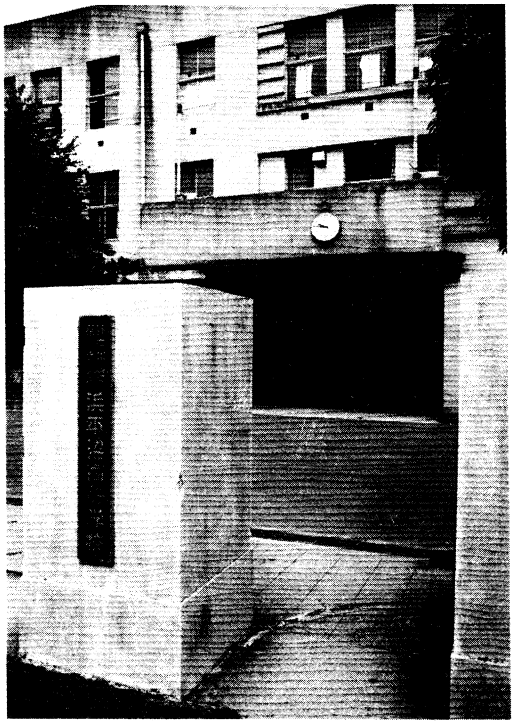
蛇足だが、当時、いつも真っ黒に日焼けしていた私に、ある数学の先生は、授業中いきなり、「水泳部ですか？」と聞くし、友人には、「パプアニューギニア!!」と言われたこともあった。だが、本人は自覚がなくて、きょとんとしていた。

思い出の部屋

祝40周年
ワンゴール
に賭けろ。
横浜市立汲沢中学校
ハンドボール部

神奈川県知事免許 (6) 7147
(社) 神奈川県宅地建物取引業協会会員
株式会社 やまと
取締役部長
桂　茂　(62期卒)
〒232 横浜市南区万世町1丁目4番地
(やまとビル1階)
TEL (045) 261 − 0325番(代)
FAX (045) 252 − 3071番

㈱ ランチェスター戦略研究所
矢野新一　昭和42年卒
〒164 東京都中野区東中野4−20−5
TEL 03 (364) 6884



創部40周年記念誌
1989年12月10日発行
発行者　横浜平沼高校
ハンドボール部
40周年実行委員会
印刷所　(有) 港栄印刷